

明治大学大学院文学研究科

2019年度

博士学位請求論文

(要約)

細石器文化期における石器生産と石材消費

—朝鮮半島と日本列島—

Tool Production and Raw Material Consumption of
Microlithic Cultural Stage

—Korean Peninsula and Japanese Archipelago—

学位請求者 大谷 薫

2019年度 文学研究科
博士学位請求論文

細石器文化期における石器生産と石材消費
—朝鮮半島と日本列島—

目 次

はじめに

第Ⅰ章 朝鮮半島における細石器文化期の研究と目的

第1節 朝鮮半島における後期旧石器時代研究の動向

1. 後期旧石器時代研究の動向
2. 細石器文化研究の動向

第2節 石器研究における基礎的方法論

1. 石器形態分類
2. 石器製作技術と作業連鎖
3. 石材消費分析
4. 石器群分析と遺跡連関

第3節 研究の目的と方法

1. 研究対象
2. 研究目的と分析方法

第Ⅱ章 古環境と変容過程

第1節 朝鮮半島と日本列島の古環境

1. 古環境研究の概観
2. 朝鮮半島と日本列島の古環境変遷

第2節 動植物相の変容過程

1. 動物相
2. 植物相

第3節 石材資源

1. 黒耀石
2. 細粒質石材

第Ⅲ章 丹陽垂楊介遺跡VI地区における石器生産と石材消費

第1節 遺跡の概要

1. 各文化層別石器群の様相
2. 石材消費状況
3. 遺跡の形成年代

第2節 丹陽垂楊介遺跡VI地区出土細石器石器群

1. 石器・石材組成と空間分布
2. 細石核形態と製作技術
3. 細石核原形形態と製作工程
4. 細石核打面・作業面
5. 細石器製作関連接合資料

第3節 垂楊介遺跡VI地区における細石器石器群の作業工程

1. 垂楊介遺跡VI地区における細石器製作工程復元

2. 細石刃剥離と小形石刃剥離技術
3. 垂楊介遺跡VI地区の石器群変容

第IV章 朝鮮半島における細石器生産と石材消費

第1節 朝鮮半島の細石器遺跡

1. 朝鮮半島の細石器遺跡
2. 河川別細石器遺跡の様相

第2節 細石核形態と作業工程

1. 細石核形態分類と遺跡グループ
2. 細石器製作工程の復元

第3節 石材消費分析

1. 細石核と細石刃の石材構成
2. 細石核形態と石材利用

第V章 朝鮮半島の狩猟具石器群と変遷

第1節 スムベチルゲ石器群

1. スムベチルゲ出土遺跡の様相
2. スムベチルゲ製作と作業規模

第2節 狩猟具石器群の作業規模と石材消費

1. 各狩猟具石器群の特徴
2. 狩猟具形態と石材消費過程
3. 石材消費と石器群構造

第3節 朝鮮半島狩猟具文化の変遷

1. 遺跡の年代決定
2. 狩猟具文化の変遷

第VI章 朝鮮半島と日本列島の細石器文化期における石器生産と石材消費の変容

第1節 細石器文化における狩猟具生産と石材消費

1. 日本列島の細石器文化研究
2. 日本列島における細石器文化の性格
3. 細石器文化における狩猟具生産と石材消費

第2節 尖頭器文化における狩猟具生産と石材消費

1. 日本列島の尖頭形石器石器群における研究
2. 尖頭器文化の狩猟具生産と石材消費

第3節 朝鮮半島と日本列島における狩猟具文化の変遷

1. 細石器文化の変遷
2. 尖頭器文化の変遷
3. 朝鮮半島と日本列島における狩猟具文化の変遷

おわりに

参考文献

1 問題意識と目的

本研究では、朝鮮半島における細石器文化を中心に、細石器生産と石材消費の工程を検討し、製作・使用・廃棄に至る一連の作業を復元することを目的とする。そして当該期にあたる日本列島との比較検討を通して人類活動の痕跡と地域文化の変容過程を究明する。

組み合わせ式の狩猟用道具として知られる細石器は、後期旧石器時代に登場する石器文化の一つとしてアジア一帯に広域的に盛行する。とくに極東アジア地域では‘細石刃’が主体となる斉一的な様相を呈しているが、その細石刃を剥ぎ取るための‘細石核’には多種多様な形態が存在する。このような細石核の形態的なヴァリエティには、その地域に根付く技術基盤と石材環境によって用いられる細石刃剥離の技術的特徴が反映した結果ととらえられる。すなわち、細石刃剥離が単純に一つの石器製作のもとに残された痕跡としてのみ認識できるものではないことを示している。また、細石核の形態差と共に石器群全体の内容にも著しい違いが見られ、同じ細石器文化でありながら異った背景のもとに成立した石器群であることを示唆していると言える。

日本列島において後期旧石器時代最末期に出現する細石器文化は、短期的に、そして広域的に列島全体へと広がる。細石核形態は‘楔形’・‘舟底形’・‘稜柱形’の大きく三つに分類され(安蒜 1979 a)、それぞれの細石核を持つ石器群はちょうど日本列島を二分するように東北地域と南西地域において明確な地域差を持って存在する。

さて、日本列島に最も接近する朝鮮半島は、ユーラシア大陸の最東端に位置し、三方を海に囲まれた立地条件から、大陸の文化要素をダイレクトに取り入れながらも固有の文化的特徴が培われた地域として注目される。日本列島とは対馬海峡を境に約 200 km ほどの距離で九州島と隣接し、細石器文化がもっとも盛んとなった最終氷期最寒冷期の約 2 万年前以降には、対馬海峡は氷橋といった形で両地域を橋渡しにしていたことが想定されている(河村 2007)。このような朝鮮半島の細石器文化は、人類の移動と文化拡散の軌跡を探ることのできる足掛かりの一つとして様々な情報を与えてくれている。

朝鮮半島の細石器は、同じユーラシア大陸の東端で隣接する中国・シベリア地域などの影響を受けた、北方地域系統の細石器石器群を主体とする。一方で、日本列島西南地域に多く分布する稜柱形細石核による細石器石器群も一部地域において存在することが明らかにされている(大谷 2010c)。そのような朝鮮半島における細石器研究では、細石核形態の技術的特徴を各地域・時期ごとに比較検討し、石器群の性格と変容過程を把握するという方法が中心となって進められてきた。

しかし、多様な細石核形態を持つ細石器石器群は、細石核だけでなく細石刃を剥がす以前の細石核原形準備、また原料となる石材獲得に至るまでの各種作業が、場から場へと移動しながら段階的に展開しながら成立していたものと考えられる。そのため、作業の全様を把握するためには、一括性のある石器群を対象とした個々の石器の詳細分析が必須であり、その結果を各遺跡間の比較を通して共通した視点から解析する方法論の確立が前提とされる。

これまで朝鮮半島において、まとまった出土量を持つ細石器遺跡の報告がごく一部に限られていたことから、遺跡の性格を十分に把握するには資料の集成が不足していた。しかし近年、調査の増加から資料の蓄積が進み、細石器文化に関する様々な研究課題を解明できる段階に入ったといえる。中でも最近調査・報告がなされた南漢江流域の垂楊介遺跡VI地区2文化層(이영조ほか 2018)では、朝鮮半島でも最大級の細石器製作痕跡を持つ石器群が集中部を持って出土し、作業全体を復元することのできる接合資料が豊富に確認された。そのため、当遺跡は朝鮮半島の細石器文化期における石器生産を解明するための極めて重要な資料であるとともに、これまでの研究仮説や課題を実証するための資料として新たな研究方針を提示してくれるであろう。

この細石器文化とともに、朝鮮半島における後期旧石器時代の代表的な狩猟具として注目されるのが、‘スムベチルゲ(합베찌르개)’と呼ばれる石器である。日本では‘剥片尖頭器’の名で知られるこの石器は、縦長剥片の基部または縁辺の一部に二次加工を加え鋭利な先端部と茎部を作り出した狩猟具として認識されている。しかし茎部ないしは中子を意味する‘スムベ’と、尖頭器ないしはヤリ(槍)を示す‘チルゲ’が合わ

さった名称は日本での概念とは若干異なり、朝鮮半島ではより広い範囲でこの石器を定義している。それはまさに日本列島における‘ナイフ形石器’の特徴とも共通した概念として用いられていると解釈される。つまり朝鮮半島におけるスムベチルゲは、日本列島のナイフ形石器に相当する文化的意義を持つ石器として位置づけることができるといえよう。

これら二つの狩猟具、細石器とスムベチルゲは、朝鮮半島の後期旧石器時代を代表する石器として多角的な方法から分析が試みられてきた。二つの石器は出現時期をはじめ製作に費やされる時間と労力、製作技術と石材消費、道具の使用方法など、様々な観点において性格を異にしているが、先行する石器技術と融合しながら変容を遂げ、朝鮮半島一帯に広がる。これらの狩猟具文化は朝鮮半島内にとどまることなく、隣接地域、とくに最も接近した日本列島にまで広がっていく。このように日本海を取り囲むように隣り合うこの両地域では、後期旧石器時代以降、共通した文化的特徴が姿を現すようになる。その共通要素こそが細石器とスムベチルゲの文化である。

このような後期旧石器時代の細石器文化と、スムベチルゲをはじめとする尖頭器文化の研究は、朝鮮半島と日本列島において異なった視点と方向性を持って進められてきた。そのため石器の製作技術と形態属性分析は、地域間で統一的な基準が設定されておらず、同一系統の技術によって作られた石器でも様々な名称が与えられるという混乱を来した。結果的に各地域の相互関係が具体的に論議されることなく、もっぱら大陸からの文化伝統の流入という一方的な情報伝播の過程を前提とした議論に終始した。

それでは朝鮮半島と日本列島における狩猟具文化とは、いかなる石器製作作業工程から構成され、石器群としての存在を確立しているのか。石器群の構造から遺跡間のつながりを見ていく中で、遺跡全体を一つの集合体としてとらえた時に、そこにはどのような連鎖構造が繰り返されているのか。以上のような視点に基づいて石器群を検討し、石器製作から使用、廃棄に至るまでの一連の作業過程を人類の行動形態として理解するためには、作業の一端に過ぎない個々の石器群の性格、それらが包括される遺跡と遺跡の相互関係を連動的にとらえていくことが不可欠である。一つの石器文化の成立と拡散は、各地域で吸収された文化要素がそれぞれ相応したかたちで変容・適応していく過程において確立するものであり、単純な情報伝達の動線を辿るだけでは文化構造の全体を把握することは不可能である。朝鮮半島と日本列島の狩猟具文化は、共通した技術要素を基盤とした上で各地域において共時的に発生した複数痕跡のまとまりであるにとらえるとき、石器研究にともなう実証的データの属性分析を通して各要素の変容過程を詳細に検討する必要がある。

本研究では朝鮮半島における細石器文化期を中心に、各遺跡における石器生産と石材消費の工程を検討し、製作・使用・廃棄に至る一連の作業を復元することを目的とする。遺跡・遺物の詳細分析によって導き出される各石器の属性をもとに、作業内容の共通点および相違点を明らかにすることが可能であると考え。またこれらの作業内容の多様性は、製作技術、出現時期、石材環境、狩猟目的物の違いなど様々な属性の変化に起因すると推察されるが、細分された属性同士の組み合わせを一つのまとまりとしてとらえると、各地域・各時期における段階的な単位区分を把握することができる。このような石器製作技術と石材利用の特徴、および共伴遺物の様相から遺跡構造をパターン化し、隣接地域である日本列島との時空間的相互関係を把握する。また、各石器群における遺跡・遺物の属性に基づいて得られる具体的根拠を通して、当該時期における狩猟活動を中心とした作業内容を抽出し、細石器文化のひろがり地域間の連関、細石器文化とともに広がる尖頭器文化との相関関係と変容過程の実態を明らかにする。

2 論文の構成

本論は全部で6つの章から構成される。第I章では、朝鮮半島における細石器文化期の研究動向と分析方法を提示する。本研究に至るまでの背景を紹介し、現在まで進められてきた朝鮮半島における後期旧石器時代研究と細石器文化研究について整理する。なかでもとくに隣接する日本列島との関係に着目し、両地域における研究の現状と課題を抽出する。その上で本論に関連する石器研究の基本的な方法論を概観し、研究目的と今後の研究課題を展望する。

第Ⅱ章では朝鮮半島と日本列島における古環境研究を整理し、動植物相の地域的様相と変遷について叙述する。また動植物相の変遷を通して把握される環境の変化を区分し、後期旧石器時代の自然環境について考察する。さらに両地域における石材資源の分布状況を把握し、石器群との関連性について検討する。とくに原産地研究が進展している黒耀石を中心に、研究の動向を概観する。

第Ⅲ章では、朝鮮半島の細石器文化遺跡として初めて本格的に調査された垂楊介遺跡を取り上げ、近年新たな調査により豊富な細石器資料が出土した当遺跡Ⅵ地区の石器群について詳細分析をおこなう。この分析を通して当該遺跡における一連の細石器製作作業工程を復元し、技術的特徴を把握する。

第Ⅳ章では前章において確認した細石器製作作業工程の内容を朝鮮半島全体において適用し、細石器石器群の製作作業と石材消費の内容を検討する。中でも細石器製作技術の特徴がみとめられる細石核形態の分析を通して遺跡をグルーピングし、細石器石器群の多様性を把握する。

第Ⅴ章においては朝鮮半島の狩猟具石器群の様相と変遷過程について考察する。朝鮮半島の後期旧石器時代に登場する狩猟具として最も主体的に用いられたスムベチルゲと細石器石器群を中心に、作業規模と石材消費過程について比較検討し、作業サイクルと遺跡間の連関を推察する。これらをもとに各狩猟具製作と石材消費方法の時空間的相違を把握し、狩猟具文化の変遷過程を把握する。

最後に第Ⅵ章では朝鮮半島でみとめられる狩猟具文化の展開を日本列島と比較検討し、両地域における狩猟具文化の全体像を把握する。また狩猟具生産と石材消費状況からとらえられる地域間での狩猟具文化の起源と拡散、発展と衰退、変遷過程を検討し、文化的動態について総括する。

3 各章の要約

第Ⅰ章 朝鮮半島における細石器文化期の研究と目的

後期旧石器時代における朝鮮半島と日本列島の研究動向は、両地域に共通するスムベチルゲ(剥片尖頭器)と楔形細石器の石器群を中心に注目されてきた。とくに隣接する北海道地域と九州地域を通じて北方・南方経路の存在が提唱され、多様な連関形態が想定された。しかし、研究の多くは両地域間で観察される様相を比較した抽象的・概括的な論議が中心であり、詳細な遺物・遺跡の属性分析を基盤とした基礎データが構築されていないのが現状である。石器形態、石器石材構成、製作技術などの基本的要素の比較検討を通して、各地域において石器群の性格を正確に把握する実資料分析の蓄積がまずは優先されなければならない。これらを実行するためには、日本列島と朝鮮半島を隔てる国境の壁を取り崩し、日本海を取り囲むアジア最東端の地域として、同一の視点から石器群の様相を再評価する必要がある。

本論では後期旧石器時代の朝鮮半島と日本列島において、狩猟具の形態と製作技術、また狩猟具製作に使用された石材を中心に検討する。その結果、各遺跡において確認される石器形態と組成・石材構成から、一連の作業工程を復元し、一つ一つの構成要素を解析していく。また遺跡間でみとめられるこれらの相違・共通点から、各遺跡の機能的役割と石器群の性格を明らかにする。さらに石材供給地と消費地の相関関係を把握し、石器製作および石材消費の時空間的変容過程を考察する。とくに、石器組成・石材構成の変化を通じて把握される各遺跡の特徴から、生業活動にともなう各種行為の全体像を明らかにするのが、本研究の最終的な目的である。

しかし、朝鮮半島の旧石器時代遺跡では、個体別資料や接合資料、石器集中部分析を通した一連の作業工程を明らかにすることができる資料が充分でない場合がほとんどである。また、良好な条件下において石器群が検出されたとしても、これらの分析に十分な時間を費やすことのできる調査環境において研究がおこなわれた遺跡は少ないといえる。そのような現状において、石器群の出土状況を正確に把握し、堆積状況と地質環境から当時の生業を復元していかなければならない。

そうした中で、丹陽垂楊介遺跡Ⅵ地区出土資料は後期旧石器時代石器群における作業内容を明確に把握することのできる一括性のある資料として、高く評価される。とくに朝鮮半島における後期旧石器時代の代表

的狩猟具であるスムベチルゲと細石器の石器群においては、当該遺跡で確認された石器・石材組成及び接合資料をもとに作業の全体像を復元することが可能である。本論文では、丹陽垂楊介遺跡VI地区から出土したスムベチルゲ・細石器石器群を対象に、各石器群における石器構成と石材利用の状況を把握し、石器形態の違いが特徴的に現れるスムベチルゲと細石核の形態分類をおこなう。これらの基礎データを基に当該遺跡における石器製作工程と作業内容の詳細を復元し、同時期に形成された朝鮮半島全体の石器群との比較検討をおこなう。またこれらの遺跡間における作業連関について考察し、朝鮮半島における後期旧石器時代の石器製作と石材利用の変容過程を解析する。

このように朝鮮半島において盛行していた礫器文化の中に流入した細石器文化は、朝鮮半島特有の流れを持ち、当地の環境に適応しながら定着していったものと想定される。そのような朝鮮半島の細石器文化の展開を紐解くためには前後の石器文化との関係、また東アジア地域の中での位置づけを整理し、立体的な解析をおこなうことが必要である。本論文ではさらに朝鮮半島と最も近接する日本列島の細石器石器群との比較検討を行うことで、当該期における文化的動態をとらえることを目的とする。

第Ⅱ章 古環境と変容過程

本章では朝鮮半島と日本列島の自然環境条件とその変容過程について、動植物相の変容過程と石材資源の分布状況に分けて見ていきたい。

朝鮮半島はユーラシア大陸最東端の一端に位置し、中国・シベリア地域と隣り合わせて大陸的な地理環境にあるとともに、三方を海に囲まれていることから海洋性立地条件をも携えた複合的な地質学的構造を持つ。総面積は約 22.3 万km²と日本列島における本州の面積(約 22.7 万km²)と近似し、長さ約 1,000 kmの南北に伸びた地形も本州の形によく似ている。

この朝鮮半島は、日本列島南端にあたる九州島と対馬海峡(大韓海峡)を境に隔てられる地理的条件化において、現在まで人類文化の交流が持続的におこなわれてきた。とくに後期旧石器時代では、寒冷気候により陸地化が進行する中、より密接な交流関係が成立されていた。日本列島側から見ると、朝鮮半島はユーラシア大陸の一部として、多様な文化情報に接することのできる窓口として重要な役割を果たしていたものと考えられる。一方朝鮮半島からすれば、日本列島、とくに近接する九州島では、温暖な気候環境における豊富な食資源が生殖する生活空間として理想的な場所であっただろう。

最終氷期中期から後氷期が始まる前段階まで継続した後期旧石器時代には、温暖と寒冷が繰り返される激しい気候変動が起こり、当時の生業活動に大きく影響を与えたと考えられる。とくに最終氷期最盛期に入る MIS2 期には、著しい海水面低下減少が起こり、現在とはまったく異なった地形・地質環境が形成されていた。このため朝鮮半島と日本列島の間を隔てる対馬海峡は、完全に陸地化するには至らないまでも、地域間を繋ぐ通路となって朝鮮半島と日本列島の文化発展に大きな役割を果たしたといえる。

また、後期旧石器時代において狩猟具製作の中心的材料として使われた石材は、生業を維持するための重要資源の一つである。後期旧石器時代の朝鮮半島と日本列島における狩猟具石材の利用状況を見ると、黒耀石、流紋岩、凝灰岩、頁岩など細粒質で鋭利な刃を作り出すのに比較的容易な石材が選択的に利用されていた。中でも黒耀石は、流紋岩質・泥岩質のマグマが地表付近で急冷却され生成されるガラス質火山岩として利用頻度が高く、朝鮮半島北部や日本列島各地で原産地が確認されている。一方、黒耀石原産地から離れた地域では、黒耀石の代わりに頁岩や凝灰岩、流紋岩などほかの細粒質石材が積極的に利用された。ここでは後期旧石器時代の朝鮮半島と日本列島において狩猟具製作に用いられた石材について、分布状況と遺跡周辺環境を検討する。

第Ⅲ章 丹陽垂楊介遺跡VI地区における石器生産と石材消費

朝鮮半島では、これまで多くの細石器文化期の遺跡が発見されている。中でも当地域において細石器研究

の幕開けを飾る丹陽垂楊介遺跡(I地区)では、多量の細石核とともに一連の作業工程を復元することのできる細石器製作関連資料がまとまって出土し注目を浴びた。その後近年調査・報告されたVI地区からも朝鮮半島最大規模の出土量を誇る細石器石器群が発見され、遺跡一帯で集中的な細石器製作作業がおこなわれていたことが明らかとなった。とくにVI地区2文化層からはスムベチルゲ石器群がともなわない、細石器のみで構成される石器群が検出され、両者が同一層位から確認されたI地区とは対照的な様相がみとめられた。本章では、丹陽垂楊介遺跡VI地区出土細石器石器群を中心に、石器群の詳細な内容を把握し各石器の属性分析を試みる。

当地区における細石核形態は、既存の分類方法(安蒜 1979)に従ってⅠ：楔形、Ⅱ：船底形、Ⅲ：稜柱形の大きく3つの形態に区分される(図Ⅲ-13)。さらに各形態ではそれぞれの技術的特徴により細分をおこなった。その結果、垂楊介遺跡VI地区2文化層から出土した細石核をはじめとする細石器製作関連資料から当遺跡における細石器製作の過程を復元すると、作業工程の区切りは第Ⅰ段階：細石核素材準備、第Ⅱ段階：細石核原形製作、第Ⅲ段階：細石刃剥離の3つの段階に分けられる(図Ⅲ-36)。その中でも細石核素材準備の第Ⅰ段階では素材形状選択から平坦面確保の2つの単位に、細石核原形製作の第Ⅱ段階では器体調整→縁辺調整→打面準備→作業面準備の4つの単位に区分してとらえることができる。こうして残された細石核の形態は主に楔形のⅠb・Ⅰd型、船底形のⅡa型であり、当遺跡における細石器製作を特徴づける要素となっていることがわかる。

第四章 朝鮮半島における細石器生産と石材消費

次に、前章で取り扱った垂楊介遺跡における細石核分類基準をもとに、韓半島全体において出土している細石核の形態分類を試みる。また細石核から察知される技術的特徴をもとに、遺跡ごとにおける残核形態の組成を見てみると、各遺跡の細石核形態は単純に一形態から構成されるのではなく、複数が共伴する複雑な様相を示していることがわかる。ここでは細石核形態の組み合わせをグルーピングして各遺跡の様相を検討し、各遺跡で確認された細石核と関連石器を基に細石刃製作技術と細石核形態の様相を検討する。

その結果、朝鮮半島における細石器遺跡は全部で5つのグループに分けて検討することが可能である。中でも垂楊介遺跡VI地区で最も多くみとめられたⅠb型細石核を中心とした細石器製作作業がおこなわれていたことが判明した。これらⅠb型を含む細石器石器群はグループBに該当するが、両面あるいは片面調整された楕円形の細石核原形をとまうことが特徴である。これに対し、調整形細石核原形がともなわないほかのグループを見てみると、グループAでは両面調整されたⅠa型細石核が含む一方で、グループBのような調整形細石核原形がともなわず、それとともにⅠb型細石核もほとんど含まれない。またグループCでは調整形細石核原形のみならず両面調整技術自体が含まれず、素材形態に順応した器体調整がおこなわれるという特徴を持つ。グループDでも同様に両面調整技術がともなわず、大形石刃の側面をそのまま利用して細石刃剥離を進行させる。

このような調整形細石核及び細石核原形を含むグループA・B石器群では主に頁岩や流紋岩などの細粒質石材を用いる場合がほとんどである一方、調整形細石核をともなわないグループC・D石器群では黒耀石を主体とした石材構成がみとめられる。また規則的な作業内容がみとめられないグループEでは両面調整技術も、黒耀石利用もともなわないことがわかる。これらは細石核形態の多様性が石材利用の状況とも相関性が高いことを示す結果としてとらえられる。

以上を整理すると、楔形細石核を持つ細石器石器群は、石材供給地周辺で細石核原形製作がおこなわれ、細石刃剥離は原産地と離れた場所で広域的におこなわれていたことがわかる。それらはすべての作業が原産地に集中した作業工程ではなく、細石核原形製作は原産地周辺、細石刃剥離は消費地周辺という、製作段階によって作業がおこなわれる地点が異なることが明らかとなった。

一方、稜柱形細石核が集中的に確認された遺跡では、楔形細石核の石器群とは異なった石材利用に基づく作業内容がみとめられる。その多くが角柱形の小型原石を利用し、打面調整以外にはほとんど調整をおこな

わず、自然面が多く残された状態で最小限の調整のみで細石刃剥離をおこなう点が特徴的である。素材形態を生かして臨機応変な成形技術を活用した、融通性の高い作業工程であるといえることができる。

第V章 朝鮮半島の狩猟具石器群と変遷

朝鮮半島では細石器とともに後期旧石器時代の主要狩猟具としてスムベチルゲの石器群が盛行した。両石器群はともに後期旧石器時代において新しく登場する石器群として共通した要素がみとめられるが、互いに既存石器群とは明らかに異なった石器製作と石材利用が進行されていた。後期旧石器時代における各石器群の作業内容では、石材獲得および消費過程が石器製作体系と一体化していたと仮定すると、石器組成と石材構成は連鎖的に変化してきたものと判断することが可能である。すなわち、狩猟具形態と石材消費における作業の相関関係は、後期旧石器時代の環境適応において必然的結果の現れであり、一定の規則性を持って適用されてきたことといえることができる。

それでは、細石器石器群とともに後期旧石器時代以降出現し始めるスムベチルゲの石器群では、どのような石材消費作業過程が繰り返られていたのだろうか。本章では朝鮮半島における狩猟具石器群として細石器とスムベチルゲの石器群を中心に、作業構造とその変遷過程を考察する。次にこれらの石器群における各遺跡での作業状況と石材消費の関係について試みる。

結果的に、両石器群において石材消費の過程は狩猟具の組み合わせによって変動があることが明らかとなった。狩猟具製作について試みると、スムベチルゲ出土遺跡では主に細粒質石材を利用する半面、細石器出土遺跡では細粒質石材とともに石英系石材、さらに新たに黒耀石の利用が開始された。またこれらに共伴する生活道具では、狩猟具と同一の石材—主に細粒質石材を利用する場合と、狩猟具とは異なった石材—特に石英系石材を中心とする場合が確認された。このように、スムベチルゲと細石器を中心とする狩猟具製作と、生活道具製作における石材消費状況は、石材の獲得方法や周辺環境条件によって異なってくるものと推察される。

また、狩猟具と加工具という性格の違う二つの石器製作において石材消費過程に違いが生じるのは、製作者が道具としての石器と材料としての石材に対する概念を明確に認識していたためであり、移動行動を通して獲得可能な良質石材を適切な時期・用途に振り分けて利用する作業プランの構成が周囲の生業条件にともなって常に変化していたためであろう。スムベチルゲと細石器の製作において石材消費方法を互いに異にするのも、そのような生業活動の運営体系に適応するための本能的判断によるものであったといえる。

朝鮮半島における狩猟具文化の変遷過程は、各石器群の石器製作および石材消費の状況から、出現—拡散—盛行—衰退にいたる過程を整理することができる。各石器群の拡散・盛行時期は、石材の消費過程と連動しており、原産地開発にともない石器製作作業が活性化されることによって遺跡・遺物数量が急激に増加する。その後盛行期を迎えると徐々に衰退へと向かい、後期旧石器時代の終わりとともにスムベチルゲ・細石器を中心とした狩猟具文化は幕を閉じる。

各石器群の出現から衰退までの時期は、一部共存関係が存在しながらも異なった展開を示している。最初の石器文化の登場以来、狩猟・加工具として使われ続けてきた礫石器は、後期旧石器時代以降も継続的に用いられたが、新技術の発達とともに次第に衰退期を迎える。代わりにスムベチルゲと細石器という、新しい概念の石器が狩猟具としての役割とともに独歩的に進化し、削器・搔器などの小型石器類が加工具として狩猟具とは別に機能的発展を遂げる。最初に登場するのは、石刃技術とともに改良された、薄く鋭利な先端を持つスムベチルゲである。40,000yrBP 以前から出現し、30,000～25,000yrBP で最盛期を迎えたのち、20,000yrBP 以降は衰退方向へと向かう。

次に、スムベチルゲとはやや遅れて登場するのが細石器である。石刃製作から漸次的に小型化していく中で細石刃製作へと進化する一連の過程が、最も古い年代を持つ垂楊介VI地区3文化層において確認されるが、確実に細石刃として現れるのは25,000yrBP 前後からであり、20,000～15,000yrBP において最盛期を迎える。とくに黒耀石の登場時期と重なっていることから、黒耀石の利用が細石刃製作において大きな影響を与えた

ものと判断される。またスムベチルゲと細石器の共伴遺跡では、絶対値において遺跡形成年代分布の幅が広いが、概ね 24,000～18,000yrBP 前後に集中する傾向がうかがえる。両石器群が実際に併用されたかどうかについては、未だ結論をくだしかねるが、同一空間内において活動時期が重なる共存期が存在したことは確かであろう。

第VI章 朝鮮半島と日本列島の細石器文化期における石器生産と石材消費の変容

本章では後期旧石器時代の細石器文化期において、朝鮮半島と日本列島で共通的にみとめられる細石器とスムベチルゲの様相を中心に、二つの狩猟具の製作技術分析を通して作業の復元と石材消費の方法を検討する。さらに地域を超えて共通した技術基盤のもとに成立した石器群として、当該期の狩猟具文化の全様を復元する。

最後に、朝鮮半島と日本列島における編年体系を整理し、後期旧石器時代の当該地域における狩猟具文化と地域間の交流について考察してみたい。まず、前章で朝鮮半島の変容過程について述べたように、スムベチルゲと細石器の共存期間と考えられる約 25,000～18,000yrBP は、朝鮮半島において遺跡・遺物数が最も集中的に出土した時期であり、当地域の後期旧石器文化が最も活性化された全盛期であったといえよう。

このような朝鮮半島と日本列島全体の狩猟具変遷過程を整理すると次のようである。後期旧石器時代の始まりとともに出現する尖頭器文化期初頭では、日本海を間に挟んで西端に位置する朝鮮半島と、関東・中部から東北地域における東端地域とに二分された石器群の分布が展開する。そしてⅢ期以降になると各地で多様な石器群が出現し、朝鮮半島における主体的狩猟具であるスムベチルゲと細石器が、九州と北海道という日本列島の南北両端部に出現し、朝鮮半島と日本列島は一つの文化共有地域圏として連結される。

とくに細石器石器群が幕を開け尖頭器を代替するようになると、狩猟具製作技術基盤とともに石器群構造自体が変化していく。それは朝鮮半島と日本列島において狩猟具の利用は、地域間の往来が繰り返されながら多様な狩猟具石器群が成立したことを示唆している。これら石器群の変遷過程は自然環境変化とも密接な関連性があると考えられ、AT 火山灰と LGM の始まりにともなう急激な領域変化が訪れ、石器群の拡散・融合を活性化させたと推察される。

おわりに

本研究では、朝鮮半島における細石器文化を中心に後期旧石器時代の狩猟具文化の変容過程を検討してきた。とくに細石器文化は東アジア全体の中でも後期旧石器時代を代表する狩猟具文化であることから、当該期における石器製作と石材消費過程を検討することは、アジア地域一帯における文化的動態を考察する上でも欠かすことのできない部分である。既存研究の成果において不足していた朝鮮半島出土石器の詳細観察・分析を基軸とし、隣接する日本列島における石器群との比較検討を試みるという、新しい視点からの取り組みであったといえる。

国境の存在しない最終氷期の後期旧石器時代では、地域間の文化的関係がより密接に連結されていたものと考えられるため、当該期の文化的変動を把握するためには、より広い視野からとらえることが必須である。本研究ではこのような各石器群の詳細な情報を洗い出し、作業内容を抽出することによって当該期人類文化における変容過程の実態を明らかにすることを試みた。さらに各地域における遺跡の時空間的關係と石器群全体の構造を立体的に復元するための一作業として、その成果は目的の一部を達したものと評価される。